

第 38 回目 新しい人を身に着る (10)

はじめに

●「新しい人を着る」というシリーズの第 10 回目で、「賢い者のように歩む」－そのシリーズのパートⅡです。「聖霊に満たされなさい」(原文では「満たされ続けなさい」という現在命令形が使われています)という今回の主題に入る前に、コンテキストを見ておきたいと思います。

- (1) 愛されている子どもらしく、愛のうちに歩みなさい。
- (2) 光の子どもらしく歩みなさい。
- (3) 賢い人のように歩みなさい。

- ① チャンスを十分に生かす－過去の時を意味あるものとして買い戻し、将来に向けて、今、与えられているチャンスを十分に生かすこと－
- ② 御霊に満たされる (今回と次回にわたって 2 回)
  - a. キリストにある聖なる「ホモ・ルーデンス」(遊び人)
  - b. 互いに語り、仕え合うことにおいて、また神への賛美と感謝することにおいて

●まずは、今回の聖書の箇所、エペソ人への手紙 5 章 18 節を見てみましょう。

【新改訳改訂第 3 版】

また、酒に酔ってははいけません。そこには放蕩があるからです。御霊に満たされなさい。

●ギリシア語原文には、「また」(「カイ」καὶ)と、「かえって」(「アツラ」ἀλλὰ)の二つの接続詞が使われています。ですから、正確には「また、酒に酔ってははいけません。そこには放蕩があるからです。かえって、御霊に満たされなさい。」となります。

●最初に接続詞の「カイ」(καὶ)があるのは、「賢い人のように歩む」ということについて、すでに第一のこととして「チャンスを十分に生かして用いる」ということが語られたからです。それに続いて「また」(あるいは「さらに」)という意味で使われています。このテキストでは、酒に酔うことと御霊に満たされることが対比されています。一方は「酒に酔ってはなりません。」、他方は「御霊に満たされなさい。」で、むしろ後者の方が強調されています。

●この世において、お酒を飲むことは日常茶飯事のことです。様々な機会に、様々な催しや集会にお酒のつかないところは、教会ぐらいなものでしょう。なぜ、酒に酔ってはならないのか、その理由が述べられています。「そこには放蕩があるからです。」

## אגרת שאל אל האפסים

●昔、1960年代に植木等の「スーダラ節」という歌がはやりました。作詞は国会議員、東京都知事にもなった青島幸男です。

チョイト一杯の つもりで飲んで  
いつの間にやら ハシゴ酒  
気がつきゃ ホームのベンチでゴロ寝  
これじゃ身体(からだ)に いいわきゃないよ  
分かっちゃいるけど やめられねえ  
ア ホレ スイスイ スーダララッタ スラスラ スイススイ

●この歌を歌った植木等という人は非常に生真面目な性格らしく、青島幸男の書いた歌詞を見せられたとき、歌うことを躊躇したそうです。しかし、浄土真宗の僧侶である彼の父から「『わかっちゃいるけどやめられない』というのは親鸞の教えに通じる。だから、きっとヒットするぞ」と励まされて歌ったそうです。ちょっと一杯のつもりの酒が、いつの間にやら、ハシゴ酒になってしまって、気がつきゃ、ホームのベンチでゴロ寝。これじゃ体がもつわけない。「わかっちゃいるけどやめられない」・・・そしてやがて身を持ち崩してしまう・・・これが聖書のいう「放蕩」という意味です。

●「小原庄助さん、なんで身上つぶした。朝寝、朝酒、朝湯が大好きで、それで身上つぶした。ああ、もっともだ。もっともだ」という歌を知っている方も多いと思いますが、「小原庄助さん」(1949年)という映画があったようです。ここにも「朝酒」が出てきます。この歌が象徴するようなストーリーが背景にあったようです。お酒によって財産を失う。身を持ち崩すということが多くあるようです。そんな生き方をあなたがたはしてはならない。「むしろ、聖霊に満たされなさい。」と使徒パウロは勧めているのです。お酒を一滴でも飲んだなら天国に行くことはできないなどと、ここで教えているわけではありません。「わかっちゃいるけど、やめられない」。そんな人生にピリオドを打って、聖霊に満たされた生き方をするようにとパウロは勧めているのです。

●前置きが長くなりましたが、それでは「聖霊に満たされる」というのはどういう生き方なのでしょう。これが今回のテーマです。

### 1. 聖霊に満たされるとは・・・

●何か特別な、尋常ではないことではありません。神の子どもとされた者にとっては、当然のように神が与えたいと願っておられることなのです。聖霊に満たされるとは、神のいのちに満たされることです。聖書においては神は、三位一位の神であり、父、子、聖霊の三位が一つとなった神です。父と子と聖霊—その三位(三者とは言わない)なる神は、ゆるぐことのない、永遠の、親密な愛で結ばれた存在です。愛の神です。かかわりの神です。そうした中に私たち人間が、他の被造物とは異なる特別な存在として、神の似姿に似せて創造されました。ですから、私たち人間も愛なしには生きられない存在であるのです。逆に言うならば、愛が注がれることによってひととき輝く存在—それが人間なのです。

## אגרת שאול אל האפסים

●「聖霊に満たされる」とはどういうことか、いろいろな人によって、いろいろな定義が存在しますが、今回は、次のような私の定義で受けとめていただきたいと思います。

- (1) キリストを信じて神の子どもとされた私たちが、神のいのちにあふれて生きることを意味します。
- (2) 神のいのちにあふれて生きるとは、神の子であることを喜び、楽しむことができることです。

●「聖霊に満たされなさい」という勧めは、その前提として、神の子どもとされた者が必ずしも神のいのちにあふれて生きていない現実があるからです。また、神のいのちにあふれて生きるということは、決して難しいことではありません。なにか特別な経験であるかのように思っている人がいます。そうではなく、神のいのちにあふれて生きるとは、単純に、神の子であることをいつも喜び、楽しむことができることなのです。

●毎朝、当教会では「詩篇の瞑想」をしております。詩篇は神と私たち人間との赤裸々なかわりを描いています。ですから時代を越えても共感できることが多々あります。その詩篇の中に神ご自身を(神の救いや恵みを)喜び神を楽しむという表現がいかに多いかということ、最近、改めて注目しています。少し、ご紹介したいと思います。「詩篇における喜びと楽しみ」です。

- ①「あなたは私に、いのちの道を知らせてくださいます。あなたの御前には喜びが満ち、

あなたの右には、楽しみがとこしえにあります。」(16 篇 11 節)

- ②「あなたの恵みを私は楽しみ、喜びます。」(31 篇 7 節)

- ③「どうか、朝には、あなたの恵みで私たちを満ち足らせ、私たちのすべての日に、

喜び歌い、楽しむようにしてください。」(90 篇 14 節)

- ④「これは(※)、主が設けられた日である。この日を楽しみ喜ぼう。(118 篇 24 篇)

※④の「これは」とは、「家を建てる者たちが捨てた石。それがなくてはならない礎の石(要の石)となったという意味です。神の家を建てるべく選ばれたイスラエルの民が、それを完成すべく遣わされた救い主を捨ててしまった。つまり、イエス・キリストを十字架につけて殺してしまった。しかし神はイエス・キリストを死からよみがえらせたという出来事を意味しています。従って、礼拝は、守るというよりも、神の救いを喜び楽しむことなのです。セレブレーション、つまり、お祭りとしての楽しみであるべきなのです。「もし、日曜をそのように楽しみと喜びの日として迎えられるなら、あなたは聖霊に満たされている人です。」

- ⑤「見よ。兄弟たちが一つになって共に住むことは、なんといいあわせ、なんといい楽しさであろう。」(133 篇 1 節)

- ⑥「私は、あなたのさとしの道を、どんな宝よりも、楽しんでいきます。」(119 篇 14 節)

●「私たちは喜び楽しみ、神をほめたたえよう。小羊の婚姻の時に来て、花嫁はその用意ができたのだから。」(黙示録 19 章 7 節)とあるように、喜びと楽しみは常にワン・セットです。「喜びと楽しみ」とは、主にある「聖なる遊びの精神」ということができます。換言するなら、これが「聖霊に満たされる」ことであると私は考えます。聖霊に満たされるということを理解する上で大切なキーワードとして、「喜びと楽しみ」というキーワードに付け加えて、もうひとつのキーワードも挙げておきたいと思います。それは「心ゆくまで飲む」ということばです。これは詩篇 36 篇に出てくることばです。「彼らは、あなたの家の豊かさを心ゆくまで飲むでしょう。」(詩篇 36 篇 8 節)。「心ゆくまで飲む」と訳された「ラーヴァー」(רָוַה)は、飽き足りる、満足する、満ち足りる、豊かに潤す、尽くす、酔う、といった意味です。心ゆくまで何を飲むのかといえば、それは主の家の豊かさ、主

の家に滴る恵みなのです。

●詩篇 23 篇の作者は「主は、私の羊飼ひ。私は乏しいことがない」(1 節)と告白しました。今日、実に多くの人々が自分の人生に何らかの不平や不満を持って生きています。「・・・であればいいのに」「・・・こうなればいいのに」「・・・ああ、なぜ自分の思うようにならないのか」と思いながら過ごしています。しかし、「主を恐れる者には乏しいことはない」こと。「主を尋ね求める者には良いものに何一つ欠けることはない。」ことを詩篇の多くの作者たちは証ししています。主は常に良い方であり、良いものしか与えることのできない方です。ですから、この方を信頼し、ゆだねることを通して安心できるのです。そのとき、私には乏しいことはないのだと確信できるのです。

●使徒パウロも「私は、どんな境遇にあっても、満ち足りることを学んだ」(ピリピ 4 章 11 節)と述べています。このパウロの告白は詩篇 23 篇の新約版といえますが、「満ち足りることを学んだ」とあるのは、さまざまな経験をしながら、それを身につけたということです。環境とか、ある人の存在によって、その人と比較することによって、神が私たちに与えようとしている良いものに目が留まらなくなります。そのために「思い煩う」ようになるのです。この「思い煩い」という病気にかかりますとなかなか治りません。「思い煩い」は、「満足する、満ち足りる」ということを学ばなくしてしまう魂の病気なのです。ですから、パウロは若き愛弟子であるテモテに対してこう勧めました。「満ち足りる心を伴う敬虔(信仰)こそ大きな利益を受ける道です。」(テモテ第一、6 章 6 節)。「敬虔」とは信仰のことです。信仰があっても満ち足りることを学んでいない、身につけていないことが多くあるからです。「満ち足りることを学ぶこと」は、「大きな利益を受ける道」だということを論じているのです。

●さて、「聖霊に満たされる」ということを理解するために、今回、二つのキーワードを提示しました。一つは、神の救いを、恵みを、神ご自身を「喜び、楽しむこと」、もう一つは「満ち足りることを学ぶこと」です。神の救いを、恵みを、神ご自身を「喜び、楽しむこと」、「満ち足りることを学ぶこと」ができるためには、主にある「聖なる遊びの精神」が必要です。誤解がないように、そのことの説明をこれからしたいと思います。

## 2. 聖なる「ホモ・ルーデンス」

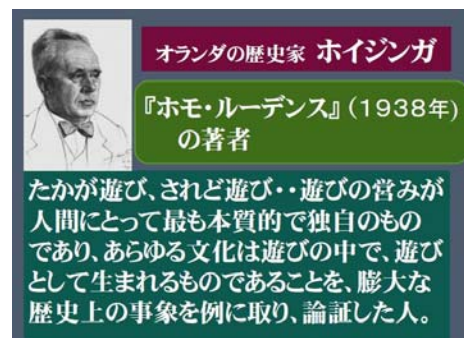
### (1) すべて遊びなり

●ホモ・ルーデンスとは、「遊び人」という意味です。

①**芸術** (音楽・美術・舞踏の創作・等)・・・特に創作は遊びからはじまります。遊びができるということはいろいろなものを創ることができます。創意工夫の始まりは遊びです。

②**料理** (懐石料理、お菓子の世界・等) レシピ通り作ったら確かに美味しいものができるかもしれませんが、遊び心がなければ、レシピなしに何も作れなくなります。

③**学問** (数学、生物・・・等)・・・学問においても、様々な発想の視点がなければ、新しい発見はできません。いろいろ試しながら遊んでいるうちに、大変なことを発見してノーベル賞を受賞した日本の学者もいます。



●ホイジンガ曰く「**すべて遊びなり**」これは教会においても大切なことではないかと思えます。「喜び、楽しむ」というのは、遊びの世界です。楽しいことをしているときは、疲れを知りません。また、楽しいことをしているところには、新しい発見がみられるのです。形式にはまらない。ただしなければならぬことを淡々とこなしているところには、喜びも楽しさもありません。「**聖なる遊び人**」 = 「**聖霊に満たされた人**」

●神は言われます。

「わたしは彼らを、わたしの聖なる山に連れて行き、わたしの祈りの家で彼らを楽しませる。」(イザヤ 56:7)と。祈りの世界も遊びです。賛美も楽しんで良いのです。これでなければならぬという決まりもないのです。遊びは、ある許容された範囲が必要です。しかしその範囲の中で自由に遊んで良いのです。私のピアノも遊びです。賛美も、祈りも、そして説教も遊びです。「遊び」であると同時に、真面目さを合わせ持っています。

## (2) 聖なるホモ・ルーデンスの特徴

- ① 喜びと楽しみにあふれている。自由人である。
  - ② 満ち足りた心を伴った敬虔(信仰)をもっている。
  - ③ いのちに溢れ、創造的、創意的、柔軟性に富んでいる。(決して、石部金吉のようではない。)
  - ④ 神の大庭で純心に遊ぶ子どものようである。
  - ⑤ 神への賛美も礼拝も、説教も奉仕も遊びとしてしまう。
  - ⑥ 聖なる「遊び人」である。
- すべての遊びは、何にもまして一つの自由な行動です。命令されてする遊び、それはもう遊びではありません。「遊び」と「真面目」の境界線が、常に、流動的。遊びは真面目に転換し、真面目は遊びにいつでも変化する。

## 結 び

●「喜びと楽しみ」と「満ち足りる心」を身に着けること、それは主にある「**聖なる遊び**」がもたらすいのちの現われです。換言するなら、これが「**聖霊に満たされる**」ことと言えないでしょうか。